

演題 ポストン大学矯正歯科大学院で学んだレガシーをデジタル矯正臨床に活かした現在

私がポストン大学大学院で学んだのは 1990-1993 ですので、デジタルというものが臨床に関係していたことがあるとすればセファロ分析のソフトぐらいだった様に思います。従来の矯正歯科治療では、顔貌写真、口腔内写真、模型製作、エックス線などの資料を採取を行なって、別の日時に診断結果による治療計画を立てて矯正歯科医が患者に治療オプションを提案する流れであったのが、デジタル技術の進化により画像診断や計画がその場で提示が出来る様になってきました。ビジュアル的にも画像でその変化を視覚化できることは治療を受診される側にも、提供する側の双方に同じ目標に向かっている事を確認出来るようになりコミュニケーションスキルの向上に繋がっていると感じています。ドクターが装置製作する際にも、治療ゴールの設定をする際にも歯の位置をコントロールをコンピューターのモニター上で拡大して細かく観察しながらの微調整は、アナログの世界では出来なかった事で働き方大きく変わってきた様に思います。今回は、少しずつ変化してきた我々が行っている臨床をご紹介します。